

知的障害特別支援学校高等部における 軽度知的障害のある生徒に対する教育課程の現状と課題 2

○猪子秀太郎 井上昌士 工藤傑史 菊地一文 大崎博史 涌井恵 小澤至賢
(国立特別支援教育総合研究所)

KEY WORDS: 知的障害特別支援学校高等部 軽度知的障害 教育課程

1. 目的

「知的障害特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程の現状と課題 1」では、国立特別支援教育総合研究所が 2010 年に行った「知的障害特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究」についての調査（以下、NISE 調査）を通して、「職業」や「作業学習」といった枠組みで進路学習といった就労に結びつく内容を学習していること、軽度の生徒が多く在籍しているタイプの学校ほど教科別の指導の比率が高まること、すべての学校に共通して生徒指導上の課題を抱えており、職業能力に関する教育だけでなくコミュニケーションや社会のルールのような自立活動や道徳に関連する内容、基本的生活習慣といった日常生活の指導に関連する内容について指導の必要性を感じていることが明らかになった。ここでは、NISE 調査における教育課程編成・実施上の課題と工夫についての自由記述回答の結果を報告し、軽度知的障害のある生徒の教育課程における今後の検討課題を明らかにする。

2. 方法

NISE 調査は、全国特別支援学校知的障害教育校長会加盟校のうち高等部のある本校、分校、分教室、校舎 590 校を対象に、インターネットのアンケートサーバーを用いて行った。回答校は 443 校、回収率は 75.1 %であった。

3. 教育課程編成・実施上の課題

NISE 調査の Q68 「教育課程編成・実施上の課題（自由記述）」には回答校のうち 241 校（54 %）が回答した。記述回答を著者らが協議により 22 個の小カテゴリに分類し、さらにその結果を第 1 著者が 8 個の大カテゴリに分類した（図 1）。「生徒の実態に関する

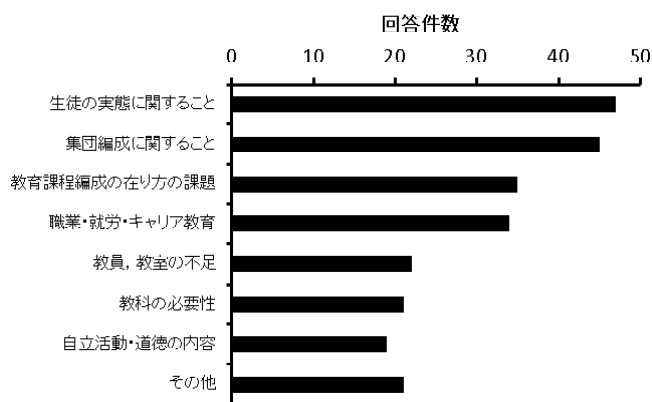


図1: 教育課程編成・実施上の課題(自由記述)のカテゴリ別件数

こと (47 件)」の課題が最も多く、「個別的な対応が必要だが困難である」、「生徒の能力差が大きい」といった内容が多かった。次に「集団編成に関すること (45 件)」が多く、うち 40 件は小中高

等部のある特別支援学校の回答であった。小中高等部のある学校においては知的障害の程度が中重度の生徒も多いことが予想され、生徒の実態に応じた指導や集団編成の在り方が大きな課題であると考えられる。教育内容に関連する課題については、「職業・就労・キャリア教育 (34 件)」「教科指導の充実 (21 件)」「自立活動・道徳に関連する内容 (19 件)」であった。

4. 教育課程編成・実施上の工夫

Q67 「教育課程編成・実施上の工夫（自由記述）」には、回答校のうち 259 校（58 %）が回答した。記述回答を著者らが協議により 19 個の小カテゴリに分類し、さらにその結果を第 1 著者が 9 個の大カテゴリに分類した。回答で多かったものは「職業教育の充実 (94 件)」、「集団編成の工夫 (83 件)」、「個への指導、対応の充実 (20 件)」であった。「道徳・自立活動の実施 (9 件)」、「教科指導の充実 (3 件)」は少なかった。

Q68 で教育内容に関する課題に挙げられたもののうち、職業教育に結びつく内容については多くの学校で工夫が行われているが、教育課程上、自立活動や道徳に位置づけられる社会性に関する指導内容や、教科指導の充実に関する取り組みは少ないことが示唆された。

5. 総合考察

軽度知的障害のある生徒の卒業後の目指す姿として就労することや社会の中で役割のある一員として存在することを考えると、働くこと、学ぶこと、生活することを通して自立と社会参加を実現していく必要がある。そのためには、作業学習や現場実習を通じた職業教育の充実を図ることと同時に、生活に生かせる知識や技能を習得するための教科の在り方、社会性や対人関係など自立活動や道徳に関連する内容について、その具体的な指導内容や効果的な指導方法及び指導の枠組みの在り方について検討を行うことが重要である。

《文献》

国立特別支援教育総合研究所(2009). 知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究. 研究成果報告書

(INOKO Hidetaro, INOUE Masashi, Takeshi, KIKUCHI Kazufumi, OSAKI Hirofumi, WAKUI Megumi, OZAWA Michimasa)